

中丸 禎子



都甲幸治編著『ノーベル文学賞のすべて』（立東舎、2021年）は、まえがきの末尾に「偉大と言われがちな一人一人の作家も結局はただの人間で、僕らと同じように苦悩し、喜び、具体的な暮らしの中から作品を紡ぎだした、という当たり前の事実」に触れ、「偉人扱いされている彼らさえ新たな友人として迎え入れる」「友愛のネットワークを増やしていけることこそが読書の喜び」「この本がそうしたあなたの役に少しでも立てたら嬉しい」（7頁）とあるとおり、ノーベル文学賞を切り口とした読書案内書である。

書評に入る前に、わたしの立場を説明しておきたい。わたしは北欧文学・ドイツ文学、特に、『ニルスのおしぎな旅』の作者セルマ・ラーゲルレーヴ（1858-1940）を研究している。ラーゲルレーヴは、女性初・スウェーデン人初のノーベル文学賞受賞者であり、ノーベル文学賞の選考を行うスウェーデン・アカデミー初の女性会員である。スウェーデンでは、2017年秋から2018年春にかけて、「スウェーデン・アカデミーの危機」が発生した。スウェーデン・アカデミーの女性会員の夫が#MeToo運動で告発されたことを機に、ノーベル文学賞受賞予定者の漏洩、スウェーデン・アカデミーの助成金授与における特定の作家・芸術家への便宜供与、女性蔑視、終身制の問題点などが明らかになったのである。解決に向けて尽力したものの、最終的には辞任に至った当時の議長サラ・ダニウス（1962-2019）は、ラーゲルレーヴと同じ「椅子番号7」を持つ、同組織初の女性議長だった。本書評では、上記のことを論じてきた経験を踏まえ、本書の内容を紹介した後、「一読者として」「北欧文学／ラーゲルレーヴの研究者・教育者として」という2つの立場から、『ノーベル文学賞のすべて』を評価したい。

本書は、「ノーベル文学賞とは何か」「専門家が選ぶおすすめの受賞作家たち」「候補に挙がったが受賞しなかった作家たち」「受賞が期待される作家たち」の四部で構成される。

「ノーベル文学賞とは何か」では、編著者により、創設者アルフレッド・ノーベルの生涯、

スウェーデン・アカデミーによる選考プロセス、受賞から50年間は選考プロセスが秘匿されること、推薦者を検索できるデータベースの紹介、そして、日本人の受賞にまつわる経緯について書かれている。特に、日本人初となった川端康成の受賞に至るプロセスは、50年を経て公開された選考資料に基づいて以下の通り詳述される。川端は、「西洋からは遠く離れたエキゾチックな美を体現する」(31頁)作家として評価されたが、技量のみを理由に受賞したのではなく、「何より大事なのは政府関係者や研究者、翻訳家たちの努力である」(32頁)。当時のノーベル文学賞委員会の書記長が、在スウェーデン特命全権大使に、川端、谷崎潤一郎、西脇順三郎の翻訳を依頼したことを機に、全権大使が各所に働きかけ、川端は谷崎とともに著名な外国人日本文学研究者らの推薦を得た。1965年には、ノーベル文学賞委員会が日本で極秘調査を行い、日本における日本人作家受賞への期待は高いこと、知識人は川端と谷崎を、一般読者は三島由紀夫を評価する傾向が判明した。その傾向を踏まえたうえで、ノーベル文学賞委員会が川端・谷崎を重視したことから、「一般読者より専門家たちの意見をより重視する、というノーベル文学賞委員会の方向性がわかる」(39頁)。上記の理由から、川端・谷崎の二人同時受賞が模索されたものの、谷崎死去により、川端は1968年に単独で受賞した。谷崎は生前に候補に挙がった際に、「西洋的な部分や性的な描写など」からノーベル文学賞委員会に「二流の西洋的な作品」と「誤解」され受賞に至らなかった(43頁)。三島も複数回にわたり候補となったが、推薦者たちは若い三島がさらに成熟することにも期待を寄せていた。川端が受賞したことにより、「三島由紀夫は絶望し、もはや自分には受賞の可能性がないのではと思ひ、晩年の政治的な活動へと突っ走る」(45-46頁)。都甲は「ノーベル文学賞など関係なく仕事を続けた谷崎は長寿を全うし、獲った川端はガス自殺し、落選した三島は割腹自殺した。生涯、爆薬作りに精を出して生前、死の商人とまで言われたアルフレド・ノーベルが作った賞により、優秀な書き手の人生が左右されるのは良いことなのか悪いことなのか、僕にはわからない」(46頁)と同賞に疑問を投げかける。そのうえで、「ノーベル文学賞なんてしょせんお祭りなんだから、その程度と思って楽しんでしまえばいいのではないか」、年に一度、人心を文学に向かわせるという点でノーベル文学賞は「尊敬に値する」が、「大事なのは残りの三百六十四日」であり、「この本を手にとっているあなたが心の中で各作家に与える、ほんのささやかな賞こそがもっとも価値がある」(47-48頁)と、「ノーベル文学賞とは何か」を締めくくる。

「専門家が選ぶおすすめの受賞作家たち」は、1人の作家につき4ページを使い、1ページ目に作家名、生没年、出身、ジャンル、日本語で読める主な作品、作家のイラストを掲載、次の3ページで各分野の専門家による解説が展開される。取り上げられている作家と書かれている出身は、川端(日本)、大江健三郎(日本)、カズオ・イシグロ(日本)、ジェイマス・ヒーニー(北アイルランド)、オルハン・パムク(トルコ)、T・S・エリオット(アメリカ合衆国)、トーマス・マン(ドイツ帝国)、アルベール・カミュ(アルジェリア)、アレクサンドル・ソルジェニーツィン(ロシア共和国)、アーネスト・ヘミングウェイ(アメリカ合衆国)、ガブリエル・ガルシア＝マルケス(コロンビア)、V・S・ナイポール(トリニダード・トバゴ)、ジャ

ン＝ポール・サルトル（フランス）、ウィリアム・フォークナー（アメリカ合衆国）、アリス・マンロー（カナダ）、マリオ・バルガス＝リョサ（ペルー）、J・M・クッツェー（南アフリカ）、トニ・モリスン（アメリカ合衆国）、ラビンドラナート・タゴール（インド）、サミュエル・ベケット（アイルランド）、ルイズ・グリュック（アメリカ合衆国）である。

「候補に挙がったが受賞しなかった作家たち」も「おすすめの受賞作家たち」と同じく一作家につき4ページが使われ、三島（日本）、谷崎（日本）、ホルヘ・ルイス・ボルヘス（アルゼンチン）、エズラ・パウンド（アメリカ合衆国）、エルンスト・ユンガー（ドイツ帝国）、ウラジーミル・ナボコフ（ロシア帝国）、アンドレ・ブルトン（フランス）、ロバート・フロスト（アメリカ合衆国）、ショーン・オケイシー（アイルランド）が紹介される。

「受賞が期待される作家たち」では、40人の作家のうち、21人が一作家につき2ページ、19人が半ページで、生年（物故者には授与されないため没年記載はなし）、出身、ジャンル、日本語で読める主な作品に続き、解説が書かれている。紹介された作家の一部を例にとると、村上春樹、多和田葉子を筆頭に、近年ノーベル文学賞の予想で名前を聞くことが多いグギ・ワジオンゴ（ケニア）、「スウェーデン・アカデミーの危機」により受賞者の発表が延期された2018年にスウェーデンの有志による一年限りの賞「新アカデミー文学賞」を受賞したマリーズ・コンデ（フランス領グアドループ）、1980年代にスウェーデン・アカデミーでその保護をめぐって議論が紛糾したサルマン・ラシュディ（インド）が挙げられる。「おすすめの受賞作家たち」「受賞しなかった作家たち」には掲載されていない地域である中国の残雪、余華、閻連科、韓国のハン・ガン、シリアのアドニス、ヨーロッパのマイナー言語地域であるオランダのセース・ノーテボーム、ハンガリーのナーダシュ・ペーテル、ノルウェーのダーグ・ソールスター、ヨン・フォッセ、ルーマニアのミルチャ・カルタレスクも掲載されている。

本書を読んだ時に最初に感じるのは、手にしやすさである。一般に広く知られているとは言えないノーベル文学賞の選考にまつわる、文学的ではなく政治的な駆け引きの記述は、世界的な賞であっても、選考に関わる一人一人は（編著者の言葉を借りると）「ただの人間」であることを示す。また、選考過程が日本の作家を例にして書かれていることや、続く三部の作家紹介がどの部も日本人もしくは日本出身の作家＝本書読者の多くが存在を知る作家から書き始められていることも、同書を手に取り、読むハードルを下げることに一役買っている。日本語訳がある作品を軸にした作家紹介も多く、第一線の専門家たちによる紹介文はどれも読みやすい。いかめしい印象になりがちな肖像画に代わって掲載されるイラストも統一感とともに親しみやすさに貢献している。その意味で、作家を偉人扱いせず、世界的な賞の権威を相対化し、読者が読書を楽しみ、作家に親しむ役に立ちたいという編著者の目的は達成されている。

受賞者だけではなく、非受賞・未受賞作家を取り上げて賞を立体的に理解する構造も興味深い。特に、ボルヘスが「ピノチェト將軍の招きに応じてしまった」（146頁）後にノーベル賞候補から外された、パウンドが「イタリア在住時代にムッソリーニに接近し、アメリカ参

戦前にはローマからの海外放送でアメリカ国民に戦争中立を呼びかけ、参戦後はルーズベルト大統領を罵倒するなどしたために、戦後国家反逆罪に問われたから」(150頁)、ナボコフが『ロリータ』の「『不道徳性』を理由に」(159頁)受賞できなかったという指摘や、ブルトンに対する「これほどノーベル賞に似つかわしくない候補者も珍しいだろう。それはまず、賞を授与され、公に認められること自体が創造の自由に反するというのが、シュルレアリスムの一貫した態度だったからだが、それと同時にブルトンのテキストには、名作という普遍的な価値を持つことに、どこまでも抵抗する何かがあるように思えるからである。」(161頁)という評価、オケイシーがノーベル賞に「ほとんど無関心で、ジェームズ・ジョイスが選出されない文学賞に疑念を感じていたそうである。アイルランドや英国の名だたる大学からの名誉博士号授与の打診に対しても、彼は辞退し続けた。『自然も神も、自分には、そのような名誉は似合わないと言っている……私は、陽気で、貧しいが惨めではない吟遊詩人にすぎず……ハーブにのせていくつか唄を歌っているだけなのだ』といつも同じ理由を繰り返していたという」(170-171頁)という情報提供は、ノーベル文学賞の権威を相対化するとともに、ノーベル文学賞がどのようなものでないかという観点から同賞を理解する構造となっている。受賞作家の筆頭に挙げられる川端について、「今風に言えば川端は、クィアな作家であった。スウェーデン・アカデミーは、『日本人の心の本質を表現する円熟の物語』と授賞理由を語ったが、果たして、川端の物語は『日本人の』という大きな主語にそぐうものだったのか」(53頁)という指摘でノーベル文学賞を相対化する視点も意義深い。わたし自身は、クィア作家がクィア作家であるという理由で「日本人の」という主語との不一致を論じられるのではなく、「日本人の」という主語そのものを検証するべきという立場であるが、今後、「川端を『日本人初のノーベル文学賞作家』という肩書から自由にし、クィア作家として、その作品をあらためて評価」(53頁)することを支持したい。ノーベル賞との関わりという観点から書かれた章は、一般的な記述のみの章よりも読み応えがあった。

その一方、疑問を感じる記述や構成もあった。編著者はこれまでに、『ノーベル文学賞にもっとも近い作家たち』(青月社、2016年)、『世界の8大文学賞 受賞作から読み解く現代小説の今』(立東舎、2016年)など、ノーベル文学賞をはじめとする著名文学賞に関連した読書案内書の編集や執筆に広くかかわってきた。以下では、今後の類書刊行に向けた提言を兼ねて、3点の指摘をしたい。

1点目は、紹介される作家の、日本および英語圏への偏りである。

もちろん、日本語読者を主な対象とする読書案内という本書の性質上、日本語訳がある作家を中心にすると、地域に偏りが出ることは避けられない。ノーベル文学賞自体に西欧中心的な傾向があることも事実である。編著者は「文学理論の教科書に出てくるような錚々たる人々が五〇年代から六〇年代にかけて多くの作家たちを推薦している。つまりこうしたヨーロッパやアメリカの知識人たちがノーベル文学賞の大きな方向性を決めていたことがよくわかる」(25頁)と書いている。これは受賞者ではなく推薦者についての文章だが、受賞者

についても、たとえば、2022年現在、3名以上の受賞者を輩出した国は、フランス16名、アメリカ、イギリス各13名、ドイツ9名、スウェーデン8名、ポーランド、スペイン、イタリア各6名、アイルランド、ロシア各4名、デンマーク、ノルウェー各3名と、インド・ヨーロッパ語圏に集中している。しかし同時に、ノーベル文学賞は、欧米中心的なカノンに挑戦する側面も持っている。たとえば、1913年にアジア初（タゴール／インド）、1939年に非印欧語初（シランペー／フィンランド語）、1945年にラテンアメリカ初（ミストラル／チリ）、1986年にアフリカ大陸初（ジョインカ／ナイジェリア）、1988年にアラビア語初（マフフーズ／エジプト）、1992年にカリブ海地域初（ウォルコット／セントルシア）、1993年にアフリカ系アメリカ人女性初（モリスン）、2000年代以降は高行健（フランス在住・中国語／2000年）、ル・クレジオ（モーリシャス諸島にルーツ・フランス語／2008年）のように多様な言語やルーツを持つ作家や、ジャーナリストのアレクシェーヴィチ（2015年）、シンガーソングライターのディラン（2016年）のように従来は「文学」枠に入らなかった作家が受賞している。本書で紹介された作家のラインナップは、インド・ヨーロッパ語圏の中でも特にアメリカおよび英語圏に偏っている。脱カノンの作家は何人か取り上げられているものの、文学史やノーベル文学賞の歴史における位置づけが明確でなく、結果として、カノン形成を強める傾向にある。

2点目は、因果関係や事実があいまいな記述である。

たとえば、「誰が候補になっているかを確実に知っているのは、ノーベル文学賞の委員会と彼らの意見を聞けるスウェーデン・アカデミーの会員十八人だけだ」（23頁）という文章からは、「ノーベル文学賞の委員会」と「スウェーデン・アカデミー」が別組織であるような印象を受ける。しかし、その直後には、「スウェーデン・アカデミーは一七八六年にスウェーデン王のグスタフ三世によって作られ、十八人で構成される。そのうちノーベル文学賞委員会の会員は四、五人であり、三年ごとに交代する」（24頁）。実際には、後者の通り、ノーベル文学賞委員会は、スウェーデン・アカデミー会員から選出される。なお、任期制の運用は2021年に開始された。

また、「三島由紀夫は絶望し、もはや自分には受賞の可能性がないのではと思い、晩年の政治的な活動に突っ走る」について、三島の非受賞と政治的な活動にこれほど強い因果関係があったと言えるのだろうか。この記述や「ノーベル文学賞など関係なく仕事を続けた谷崎は長寿を全うし、獲った川端はガス自殺し、落選した三島は割腹自殺した」といった比較は、たとえばドナルド・キーンのような回想を踏まえたものと推測される。

三島は川端の受賞を喜び、おそらくその気持に嘘はなかった。しかし、三島はノーベル文学賞の順番がまわってくる地理的要因から考えて、次の日本人の受賞までに少なくとも二十年はかかることを知っていた。彼は、それまで待てなかった。三島は、武術に打ち込んだ。一九六九年十一月、三島と彼の私兵である「楯の会」は、国立劇場の屋上で「パレード」を演じた。川端はこの式典に招待されたが、出席を断わった。当時私が聞いた話では、

腹を立てた三島は、川端より谷崎の方が大作家であることが今わかった、と人々に話したそうである。彼は差し迫った死のことが頭であって、ひどく精神が張り詰めていたかもしれない。ノーベル文学賞受賞の望みは、三島を自殺から遠ざけていた。しかし今やその望みは打ち砕かれ、彼の「ライフワーク」である最後の四部作は終わりに近づこうとしていた。死への道をさえぎるものは、何もなかった。

川端は、三島の死に愕然とした。川端は不当な判断が行なわれたと感じていたかもしれないし、自分より三島が賞を受けるべきだったと思っていたかもしれない。満足のいく作品を何も書けないまま川端は、日本文学の国際的評価を高めるのに役立つような企画に打ち込んだ。彼は、一九七二年秋に開催される外国人日本文学研究会会議の発起人だった。最後に川端に会った時、彼はこの会議について熱っぽく語っていた。しかし会議が始まる六カ月前、川端は自殺を遂げた。大岡昇平によれば、ノーベル文学賞が三島と川端を殺したのだった。¹

同業作家・友人たちの言葉は、三島を理解する際の貴重な判断材料であるが、それだけをもって作家の行動を説明することはできない。さらに、受賞を逃して絶望することと自殺を遠ざけていた受賞の望みが潰えること、20年待たなければならないことと可能性がないことはイコールではないし、キーンは非受賞のほかに、『豊饒の海』完結も挙げている。三島が川端や谷崎のノーベル文学賞受賞に向けて推薦文を書いた²、「楯の会」は川端のノーベル文学賞発表以前の1968年2月に結成された、三島は政治活動と並行して文学活動を続けた、といった辞書的な事実からも、上記の書き方には疑問が残る。

3点目は、本書全体にわたり、スウェーデンの、あるいは北欧の賞としての側面への言及が極めて少ないことである。「おすすめの受賞作家」にも、ノーベル文学賞を受賞した8名のスウェーデン人作家、デンマーク、ノルウェー、フィンランド、アイスランドを併せると16名の北欧作家は一人も取り上げられていない。なお、これらの作家はいずれも、入手困難な作品はあるものの、日本語訳自体は刊行されているため、翻訳のない作家を除外した結果ではなさそうだ。

そうした中で唯一、スウェーデン人の受賞者に触れられるのは、「一九六四年と六五年にはスウェーデンの作家で詩人のハリ・マーティンソンが川端を推薦する。余談だがマーティンソンはその後、一九七四年にノーベル文学賞委員会に所属しながら自らにノーベル文学賞を与えた。つまりはかなり問題含みの人である」(31頁)という一文である。

ハリ・マッティンソンは、1949年にスウェーデン・アカデミー会員となり、1950年から69年までに、川端、三島(64年・65年・67年)、谷崎(64年・65年)を含む29回のノミネートをしたことが現在公開されている。1974年、マッティンソンはエイヴィンド・ユーンソンとともにノーベル文学賞を受賞したが、受賞者2名がいずれもスウェーデン・アカデミーの会員であったことで厳しい批判の対象となった。マッティンソンはその後、この批判を大きな理由の1つとして、1冊も本を書くことなく、1978年、ハサミによる「ハラキリ」

で世を去った。スウェーデン人の受賞者8名のうち7名が1974年までに受賞し、8人目のトマス・トランストロンメルは2011年を待たねばならなかったことから、マッティンソンらへの批判を機にスウェーデン・アカデミーが慎重になったことが推測できる。それでも近年、高行健（2000年）、莫言（2012年）のスウェーデン語訳をスウェーデン・アカデミー会員が手掛けたことが問題になるなど、ノーベル文学賞受賞者やその利害関係者と、スウェーデン・アカデミー会員の近さはアクチュアルな問題だ。マッティンソン受賞の経緯は2025年に開示される（現時点で公開された情報からは、1964年から71年にかけて8回の推薦を受けたことが分かる）が、仮に便宜供与が認められるとしても、それは、スウェーデン・アカデミーの組織やスウェーデンの言語文化の問題として検証されるべきであり、マッティンソン個人の気質に簡単に帰すことはできない。

また、「受賞が期待される作家たち」の選考理由が記載されていないことも指摘しておきたい。先述した通り、ノーベル文学賞の候補者は50年後に公開されるため、メディアで上がる候補者は正式発表された作家ではなく、「だいたい、イギリスの賭けをやっている会社が自分たちのために作ったオッズのリストが元になっている。もちろん的中することも多いが、根本的には当てずっぽうだ。したがってここ数年、誰それが連続してノーベル文学賞の候補になっている、みたいは報道があっても決して信じてはいけない」（23頁）。『ノーベル文学賞にもっとも近い作家たち』は、オッズリストを参照して、「オッズ外でも有名な気になる作家から、数十年後に受賞しそう（だと思いたい）作家まで、なるべく多くの国から選んでみた」（89頁）という方針で、実際にこの中から3名の受賞者が出ているのは慧眼である。しかし、読んでほしい未受賞者ではなく、受賞が期待される作家の紹介を特色の一つとして本を編むならば、ノーベル文学賞の理念と傾向に照らした理由付けが不可欠である。国際的な知名度や受賞経験を持つ作家がノーベル賞に値する、ノーベル賞はそうした作家に授与されることで価値が高まると示すならば、「偉大な作家」とノーベル文学賞が、更にお互いを権威付けする結果になるからだ。

北欧文学の立場からは、傾向を考える際に、「世界文学」の観点だけでなく、スウェーデン／北欧文学の動向にも目を向けたい。近年、たとえば、スウェーデンに同化しようとする先住民を描いた映画『サーミの血』（2016年）がヒットし、『アナと雪の女王2』（2019年）がサーミとの「合意」に基づいて制作され、北欧語作品を対象とした「北欧理事会文学賞」では、2021年、ニヴィアック・コリーニウッセン『花の谷』（2020年）が、グリーンランド語初の受賞を果たした。コリーニウッセンはグリーンランド語・デンマーク語の二言語作家であり、受賞作は、ドイツ語をはじめ複数の言語に訳されたデンマーク語オリジナルではなく、著者自身によるグリーンランド語訳版である。ここから見えてくる傾向は、先住民の言語や文学、文化への関心の高さとともに、国際性ではなく地方性、オリジナルではなく翻訳への評価の変化である。本書の「受賞が期待される作家たち」には、「植民言語である英語と決別し、ギクユ語で執筆するようになった」（179頁）ジオンゴや、「アフリカ」や「アフリカ人」といった「唯一の起源」に懐疑的で、「言語についても『私はマリーズ・コンデ語

で話す』と発言し、母語か植民言語かの二択ではなく、あらゆる言語を自分の外にあるものとみなした上で、身体を通して自分自身の言語を生み出そうとする」(180-181頁) コンデが掲載されている。もちろんゾンゴもコンデも、またコリーニウッセンも、国際性や受賞歴があるからこそわたしたちの知るところとなるし、北欧理事会文学賞も、ノーベル文学賞の存続を前提として良い作家の受賞を期待することも、そもそも書籍が出版されること自体も、権威と表裏一体である。それでも、「ノーベル文学賞への期待」という観点で作家たちについて書くとき、国際的な知名度や受賞歴という過去の権威を評価軸に置くのではなく、過去のカノンを破壊する、新しい流れに位置づけることはできないだろうか。そして、世界各地や日本の作家たちから、そのような観点からノーベル文学賞が期待される作家を発掘することはできないだろうか。あるいは、ノーベル文学賞にそのような役割を求めることはできないだろうか。

スウェーデン・アカデミーは、もともと、絶対王政下の文化政策の一環として、スウェーデンの言語文化を保護ないしは権威化するために、アカデミー・フランセーズをモデルに作られた。第1回のノーベル文学賞受賞者はアカデミー・フランセーズ会員のシュリ・プリュドム(1901年)であり、その後もスウェーデン・アカデミーは、スウェーデン人の受賞者をすぐには出さないことで国際性を示すことを意識した。ノーベルは「スカンジナビア人であるとなんに関わらず、もっとも価値ある者が受賞者となる」(20頁)と遺言したが、初のスカンジナビア人受賞者がノルウェー人(ビョルンソン/1903年)であることから、この傾向はうかがえる。話者人口1000万人(ノーベル文学賞開始時は500万人)のスウェーデン語が存続・発展するための方策と言えるが、そのようにして高まった国際的な賞としての名声は、破格の賞金額やメディアの注目とともにノーベル文学賞に権威を与えた。上述した脱カノンへの挑戦が、スウェーデンの/欧米の価値観に沿った新たなカノンを作った側面も否めない。その結末の一つが「スウェーデン・アカデミーの危機」であったことを考えるとき、ノーベル文学賞がスキャンダルの対象ではなく文学賞として存続するためには、その権威を繰り返し問い直し、検証していくことが必要である。

現在すでに権威のある作家をノーベル文学賞への期待というトピックでさらに権威付けするのではなく、スウェーデン・アカデミーに対しては提言を、読者に対してはあまり知られていない作家の情報提供を、そして、作家に対しては新たな価値のある文学作品を執筆する契機を提供すれば、そのことは、「残りの三百六十四日」を大切に、個々の読者による「ほんのささやかな賞」に価値を置く編著者の目的にも沿うのではないだろうか。今後、更に文学発展の一助になるような類書を期待したい。

注

1. ドナルド・キーン『ドナルド・キーン自伝 増補新版』角地幸男訳、中公文庫、2019年、215-216頁。
2. 吉武信彦「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル文学賞と日本、谷崎潤一郎をめぐる推薦と選考—1958～1965年——」『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会）第22巻第4号、2019年、37-38頁。川端は1961年5月27日付の書簡で三島に「のおべる賞」のための「するせん文」を依頼し、三島は5月30日付の書簡に Recommending Mr. Yasunari Kawabata for the 1961 Nobel Prize for Literature を同封した。川端康成・三島由紀夫『川端康成 三島由紀夫 往復書簡』新潮社、1997年、139-141頁、223-224頁。